

報道関係各位

2017年9月12日

## 「ラウンドファスナー長財布」を生み出した、 老舗革財布メーカー直営ブランド、「mic」(ミック)の 神戸三宮店が9月30日に移転・リニューアルオープン！

(株)ラモードヨシダ(社長：吉田昌充/東京都台東区)が運営する革財布ブランドmic(ミック)の神戸三宮店は、9月30日(土)、三宮センター街1丁目に移転・リニューアルオープンいたします。ラウンドファスナー型革財布や革小物を中心に、全140種類の商品をラインナップ予定。リニューアルオープンを記念したキャンペーンも開催いたします。



※店舗外観イメージ図(左側)



新店舗 住所：兵庫県神戸市中央区三宮町1丁目5-23  
センター街1丁目「万平」さん隣

### < ラウンドファスナーが充実！ >

牛革はもちろん、コードバン、姫路産の漆を塗った革を使用したものなど、財布を中心とした革小物、全140種類の商品を取り揃えます。関西圏で人気のラウンドファスナー長財布は特設コーナーを設け、豊富な型の中から納得のいくお買い物をしていただけます。

### < リニューアル記念キャンペーン開催！ >

オープンから1週間リニューアルオープン記念として、以下のキャンペーンを開催いたします。

1. お買い上げ税込み1万円以上で、レザーキーチャームプレゼントいたします。
2. イニシャル、名入れ刻印サービスが無料になります。

### < ギフトに最適！イニシャル刻印 >

平日ならば即日お渡し可能な、イニシャル刻印サービスも開始いたします。1点¥540(税込)で、書体は2種類、押し方は3種類からお選びいただけます。お名前入りの世界で一つだけの革小物は、プレゼントにも最適です。ラッピングのサービスも無料で行わせていただきます。

#### mic(ミック)とは？



(株)ラモードヨシダ(代表取締役：吉田昌充/東京都台東区)が運営する革財布ブランドです。立ち上げは1978年、「財布は暮らしの道具です」をブランドコンセプトとし、手ごろで使い心地の良い財布の理想形を追い求め、既成概念にとらわれない、様々なアイデアを盛り込んだ商品造りを行っています。代表的な商品である「ヒップポケット革財布」は、ズボンを傷めず取り出しをスムーズに行える独自形状で2003年にグッドデザイン賞を受賞いたしました。現在、上野・御徒町・吉祥寺・自由が丘・神戸三宮の5店舗とオンラインストアを展開しております。

お問い合わせ先

mic 上野店/担当：杉浦

TEL/FAX：03-5816-1821 MAIL：sugiura@lmy.co.jp

## ラウンドファスナー 長財布物語

三方を囲うファスナーが付いた「ラウンドファスナー長財布」は、今や男女問わず広く一般に受け入れた形です。特に関西で人気があり、リニューアルオープンする神戸店でも年間売上上位3つを占めています。実はこの形状、**micを運営するラモーダヨシダが1960年代半ばに考案した形なのです。**今回はラウンドファスナー長財布の開発にまつわる創業者の裏話をご紹介します。

### 着想の源は「〇〇ケース」

micを運営する(株)ラモーダヨシダの創業者、吉田蒼生雄(現会長)は1953年に「洗面ケース」を製造する製作所に入社しました。

「洗面ケース」とは、自前の洗面用具を入れるファスナー式のポーチのことで、当時は旅館やホテルにはアメニティは一切無かったため、旅行の必需品となっていました。形状はまさにラウンドファスナー長財布と同じく、三方をファスナーで囲まれた形状をしていましたが、製造方法を熟知していた吉田はこれを財布に応用できないかと考えました。

そして、1961年、吉田は革財布メーカー「吉田製作所」として独立しますが、1964年に台東区松が谷に工房を構えてから、本格的に洗面ケースの製法を応用したラウンドファスナー型財布の製造を開始します。



左上が洗面ケース



(株)ラモーダヨシダ創業者・現会長  
吉田蒼生雄

### 財布職人にはできない財布

一見すると簡単にできそうなファスナー式の財布ですが、その当時いた多くの財布職人には、製造できない二つの事情がありました。一つ目の壁は、ファスナー部分を縫うミシンがなかった事です。立体的な形状をしたファスナー式のもの、ちょうど棒が横に突き出たような「腕ミシン」でしか縫えません。当時の財布は、紙幣しか入らない平たい「束入れ」や「がま口財布」が主流で、それは「平ミシン」で製造できたので、財布職人に「腕ミシン」は不要でした。



平ミシン：平台がついている



腕ミシン：台が無く、棒が突き出ている



また、「束入れ」の職人たちは、ファスナーを貼り込むノウハウも持っていませんでした。ファスナーを縫う前に本体のパーツに貼り付けなければ縫えません。特に角部分を正確に貼り込めないと、ファスナーが噛み合わなくなってしまい、開け閉めできなくなってしまいます。

その二つの問題をクリアできたのが、洗面ケースの職人たちでした。彼らは腕ミシンで立体的なものを縫い、またボール紙や木で型を作り、それにパーツをはめ込んで正確にファスナーを貼り込んでいました。吉田はそうした背景、職人の技術の違いを知っていたので、迷わず洗面ケース職人に、ラウンドファスナー型財布を作ってくれるよう頼んだのです。



今使用している型。商品ごとに制作される。

### 「あんたが言うならええもんなんやろ」

当時、お札も小銭も一つにしまえるラウンドファスナー長財布は画期的な形状でしたが、問屋の反応はマチマチでした。「何とも言えないけれども取りあえず置いてみようか」、「実際こんな財布、売れるのか」と言った懐疑的な見方をする顧客もいました。ただ、大阪などの関西方面の問屋は「あんたがそんなに良いと言うなら、良いもんなんやろう」と、いち早く採用してくれました。そこから徐々に注文数が増え、今度は逆に生産のキャパシティが足りなくなってしまい、職人たちに腕ミシンを導入するよう頼んで回る事態になったと、吉田は振り返っています。

### 進化するラウンドファスナー財布

ラモーダヨシダのそうした背景を元にmicは、財布はもちろん、カード専用ケース、小銭入れなど様々な製品にラウンドファスナー方式を採用しており、表革の異なるものも含めると30種以上のラインナップとなっております。特に収納部の配置を工夫し、たっぷり入りながら、使い勝手も向上させた「ラウンドマルチウォレット」と「マルチウォレット」はmicオリジナル型となっており、主力商品の一つとなっています。

